

3. 愛知・岐阜・三重県で1992年に出生した 日本人65,207名中の口唇・口蓋裂発生頻 度に関する研究

夏目 長門* 鈴木 俊夫* 河合 幹*

要約：1992年1月1日より12月31日の間に出生した日本人65,207名中の口唇・口蓋裂発現率について調査を行った。その結果、90名(0.138%)に口唇・口蓋裂が認められ、口唇・口蓋裂発現頻度は724人に1人であった。

見出し語：口唇裂，口蓋裂，発現率

研究方法

愛知・岐阜・三重県の3県下に所在するすべての出産施設に調査依頼を行い、協力の得られた757施設のうち380施設を調査対象施設とした。調査対象者は65,207名であり、これは同時期の愛知・岐阜・三重県の全出生数109,717名の59.4%である。

下記の項目について記載を依頼した。

1. 施設における総出生数
2. 口唇・口蓋裂児の有無
 - a. 裂型， b. 性別， c. 出生月， d. 出生時体重， e. 他の合併症の有無・内容
3. 施設所在地

結果

愛知県の総出生数の61.5%に当たる44,094名(249施設)，岐阜県の総出生数の56.1%に当たる11,416名(77施設)，三重県の総出生数の54.8%に当たる9,697名(54施設)について調査した。本調査では愛知県は44,094名中に54名，岐阜県は11,416名中に23名，三重県は9,697名中に13名の口唇・口蓋裂児が認められた。

表1 調査対象者(愛知・岐阜・三重)(1992)

	調査対象	総出生児数
愛知	44,094名(61.5%)	71,680名
岐阜	11,416名(56.1%)	20,351名
三重	9,697名(54.8%)	17,686名
合計	65,207名(59.4%)	109,717名

表2 本症患者出現頻度(愛知・岐阜・三重)(1992)

	本症患者	調査対象者	%	出現頻度
愛知	54名	44,094名	0.122%	1:816.6
岐阜	23名	11,416名	0.201%	1:496.3
三重	13名	9,697名	0.134%	1:745.9
合計	90名	65,207名	0.138%	1:724.5

* 愛知学院大学歯学部口腔外科第2講座

その結果、本症の出現率は愛知県0.122%(1:816.6), 岐阜県0.201%(1:496.3), 三重県0.134%(1:745.9)であった。この数値をもとに調査対象年の本症患者の総出生数を推定すると95%信頼限界内において、愛知県87.3~87.6名, 岐阜県40.8~41.0名, 三重県25.4~25.5名の本症患者が出生していたと推定された。

裂型分類についてみると愛知県では口唇裂22名, 口唇・口蓋裂17名, 口蓋裂15名, 岐阜県では口唇裂6名, 口唇・口蓋裂8名, 口蓋裂9名, 三重県では口唇裂3名, 口唇・口蓋裂9名, 口蓋裂1名であった。

本調査も愛知県においては12年目を迎え、患

表3 本症患者の総出生数の推定
(愛知・岐阜・三重)(1992)

愛知	87.3~87.6名	(95% C.L.)
岐阜	40.8~41.0名	(95% C.L.)
三重	25.4~25.5名	(95% C.L.)

者数も愛知・岐阜・三重の3県を合わせると800名を越えた。そこで生下時体重が明らかな684名について裂型別に体重を集計したところ口唇裂2985.2g(±34.8), 口唇・口蓋裂2988.2g(±34.4), 口蓋裂2987.2g(±41.4), 男女別では男3023.9g(±29.4), 女2940.8g(±30.1)であった。また、裂型・性別合併症発現比率について集計したところ男性では口唇裂13.6%, 口唇・口蓋裂13.2%, 口蓋裂29.6%, 女性では口唇裂11.9%, 口唇・口蓋裂21.4%, 口蓋裂20.0%であった。

考 察

本研究は1981年より本学の所在する愛知県において愛知県産婦人科医会、並びに助産婦会の協力を得て調査を開始し、1984年からは科学技術用コンピューター日立-7300を導入して解析プログラムを開発してデータベース化をはかっ

表4 裂型分類(愛知・岐阜・三重)(1992)

単位:名

	口唇裂	口唇・口蓋裂	口蓋裂	合計
愛知	22	17	15	54
三重	6	8	9	23
岐阜	3	9	1	13
合計	31 (34.4%)	34 (34.7%)	25 (25.0%)	90 (100%)

表5 裂型・性別平均体重

mean(±SE)

	口唇裂	口唇・口蓋裂	口蓋裂	計
男	3048.6 (±45.8)	3025.8 (±39.4)	3043.4 (±79.4)	3023.9 (±29.4)
女	2893.5 (±52.2)	2971.4 (±55.4)	2956.5 (±46.8)	2940.8 (±30.1)
合計	2985.2 (±34.8)	2988.2 (±34.4)	2987.2 (±41.4)	2986.9 (±23.5)

(g)

愛知県 1984~1992年 481名
岐阜県 1968~1992年 131名
三重県 1988~1992年 72名

計

684名(体重不明者3名含む)

表6 裂型・性別合併症発現比率

	口唇裂	口唇・口蓋裂	口蓋裂	計
男	21/154 (13.60%)	24/182 (13.20%)	16/54 (29.60%)	61/390 (15.60%)
女	13/109 (11.90%)	24/112 (21.40%)	19/95 (20.00%)	56/316 (17.70%)
合計	34/263 (12.90%)	48/294 (16.30%)	35/149 (23.50%)	117/706 (16.60%)

1983～1992年愛知・三重・岐阜
三県の裂型性別の明らかな744名中、合併症不明38名を除く

表7 裂型分類(愛知・岐阜・三重)(1981～1992) 単位：名

	口唇裂	口唇・口蓋裂	口蓋裂	計
男	186 (37.1%)	247 (49.2%)	69 (13.7%)	502 (100%)
女	125 (31.9%)	151 (38.5%)	116 (29.6%)	392 (100%)
合計	311 (34.8%)	398 (44.5%)	185 (20.7%)	894 (100%)

ている。本プログラムには1992年までの928名の登録を行った。本データベースに登録された1982～1992年の総調査対象数は569,066名で本症患者は829名であったので、本症発現率は0.146%であった。

裂型分類については1981～1992年の894名についてみると表7のごとく男性では口蓋裂186名、口唇・口蓋裂247名、口蓋裂69名であった。女性では口蓋裂125名、口唇・口蓋裂151名、口蓋裂116名であった。

我々の施設においては、データベースにおいて疫学解析を行う場合、病院統計による誤差を最少にするためPrimary caseのみを基本資料とするようにしているが、この方法をとったところで前述のことを防ぎ得ない。このため、我々は、本症発現率、季節変動については東海地区の出産施設のものをモニタリングして、本症の

発現率に著しい変動が生じた場合はただちに我々の施設に来院した患者集団において、環境要因等を含めた詳細な調査を行う体制をとっているが、現在まで幸いにして本症発現率の著しい上昇は認めていない。

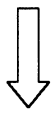
しかし、今後もこのような状態が生じた場合にただちに即応できるような体制を維持したいと考えている。

文 献

- 1) Natsume. N, Suzuki. T, and Kawai. T: Clinical analysis cleft patterns of lip and palate, Cong. Anom., 24, 74-82, 1984.
- 2) Natsume. N, Suzuki. T, Kawai. T: The prevalence of cleft lip and palate in the Japanese. Brit. J. Oral. Maxillofac. Surg., 26, 232-236, 1988.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：1992年1月1日より12月31日の間に出生した日本人65,207名中の口唇・口蓋裂発現率について調査を行った。その結果、90名(0.138%)に口唇・口蓋裂が認められ、口唇・口蓋裂発現頻度は724人に1人であった。